

# 啄木のふるさと、『もりおかの知った人』

## 平成20年 秋の部 優秀賞発表

### 優秀賞十首

「啄木のふるさと」『もりおかの短歌』は、啄木が生れ育った盛岡を訪れる観光客や市民による啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち』『もりおか』を推進することを目的に本年度から実施している事業です。

年間を四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分け募集。

9月から11月まで募集した秋の部にも、夏の部同様、観光客や市民の方々から多くの短歌が投稿され、この度優秀賞10首が選定されました。

投稿箱は、当所や盛岡市役所、啄木関連の観光施設、市内ホテルなどに設置しており、現在は冬の部を募集しておりますので、啄木になつた気分で三行書きの短歌に一度挑戦してみてはいかがですか。

朝市  
お国詠りのまんなかで  
みみこた

神子田ホルモン独り味わう  
宮城県仙台市 阿部 賢市

啄木も賢治も生みし  
みちのくの広き大地に  
馬ぞいななく

大阪府豊中市 大塚 頴三

古への城柵の跡は閉かなり  
秋雨の中  
独り歩かむ

千葉県流山市 小金丸 敏

不來方の  
城址歩めば啄木の  
吐息のやうな団栗ひろふ

秋田県横手市 今田 保雄

せみの声  
ぼくらのいえにふりそそぐ  
八月のあめさんさのよう

岩手県盛岡市 原 広大

平成二十年秋の部  
投稿数 百七十首

選者 八重嶋 熱氏

盛岡の上の橋町お餅屋の  
米蒸す匂い  
橋こえて来る

岩手県大船渡市 斎藤 陽子

子供らが公園でする落葉焚き  
煙の中に  
啄木がいる

岩手県盛岡市 中島 久光

メールで送る  
写真を妻に

東京都東大和市 杜野 泉

誓ひ見ゆ  
新渡戸稻造を生みし盛岡  
公園の石碑に平和の

大阪府大阪市 福田 夏美

夕闇をとかして覗く万華鏡  
紅葉燃ゆる  
不來方の城

北海道札幌市 古川 栄子

もりおか  
まんげきょう  
夕闇をとかして覗く万華鏡  
紅葉燃ゆる  
不來方の城



# 啄木のふるさと、「もりおかの知った人」

## 平成21年 秋の部 優秀賞発表

### 秋の部優秀賞十首

「啄木のふるさと」「もりおかの短歌」は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち もりおか』を推進することを目的に昨年度より実施している事業です。

年間を四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分け募集。

9月から11月まで募集した秋の部にも、これまでと同様 観光客や市民の方々から多くの短歌が投稿され、この度優秀賞10首が選定されました。投稿箱は、当所や盛岡市役所、啄木関連の観光施設、市内ホテルなどに設置しており、現在は冬の部を募集しておりますので、啄木になつた気分で三行書きの短歌に一度挑戦してみてはいかがですか。

不來方の城跡の池  
秋深く水面の紅葉  
めらめらと燃ゆ

岩手県盛岡市 鈴木 充

小岩井農場アーチエリー  
娘の好きな盛岡の街  
ぴよんぴよん舎

千葉県市川市 鈴木 桂子

還暦に  
啄木の里走り抜け  
十五の心思い出しけり

埼玉県上尾市 中久保 齊

「おい節子今帰つたぞ」と  
啄木が玄関に入る  
新婚の家

岩手県八幡平市 及川 棱

イーハトーヴの町訪えば銀世界  
雪踏みしめて  
キユツキユツと鳴かす

奈良県奈良市 梅本 幸子

平成二十一年秋の部  
投稿数 二百五十首

選者 八重嶋 熱氏



姫神は  
入り日に紅葉照り映えて  
雪降る前の華やぎを見す

宮城県仙台市 沼沢 修

渋民へ会いに来ました啄木に  
姫神山見ゆ  
岩手山見ゆ

北海道石狩市 原田 章子

ふるさとは  
いつも鮮らしありがたし  
岩手嶺に対き太く息はく

青森県八戸市 田村 三之助



岩手県八幡平市 及川 棱

奈良県奈良市 梅本 幸子

選者 八重嶋 熱氏

## 『啄木のふるさと』『もりおかの短歌』

### 平成22年度 秋の部 優秀賞発表

#### 秋の部 優秀賞十首

啄木のふるさと、『もりおかの短歌』は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち・もりおか』を推進することを目的に実施している事業です。

年間を四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分け募集。

9月から11月まで募集した秋の部にも、これまでと同様、観光客や市民の方々から多くの短歌が投稿され、この度優秀賞10首が選定されました。

投稿箱は、当所や盛岡市役所、啄木関連の観光施設、市内ホテルなどに設置しており、現在は冬の部を募集しておりますので、啄木になつた気分で三行書きの短歌に一度挑戦してみてはいかがですか。

けらつつき  
三十一文字を歌うがに  
木魂してくる城垣の上

宮城県仙台市 阿部 堅市

たくばくの故郷抱く岩手山  
柞紅葉の  
今盛りなり

福島県浪江町 天野 史朗

啄木の  
渋民村をつつむがに  
やさしく聾ゆる姫神山は

茨城県龍ヶ崎市 岡田 進

岩山に登れば見ゆる  
盛岡の町で愛しき  
青春の日よ

岩手県滝沢村 小田佐枝子

山車が練る  
盛岡八幡秋まつり  
音頭をあげし父や恋しき

岩手県滝沢村 小田佐枝子

高速路よりはじめて眺めし岩手山  
雪をまとひて  
大きく立ちをり

青森県青森市 木浪みつゑ

「車門」てふ  
茶房の在りし彼の街は  
かつら葉舞いし季にてあらむ

東京都新宿区 佐藤 慶子

風さやぐ  
木立ぬければ岩山の  
展望台は天空の蒼

岩手県盛岡市 鈴木 文子

中津川鮎の溯上を眺めれば  
もりおかの街  
秋の始まり

岩手県盛岡市 鈴木 充

鮎帰る清き流れの中津川  
産卵終えて  
命はかなし

岩手県盛岡市 花坂 俊子

平成二十二年十二月選 秋の部  
投稿数 百五十九首

選者 八重嶋 熟氏



秋の部優秀賞十首

不來方の城跡  
こずかた しろあど  
つゆ はれま

梅雨の晴間にて

もみじ岩葉のトンネル歩く  
わかば どんねるある

外山を発ち  
そとやま た

この峠より盛岡を望みし  
とうげ もりおか のぞ

少女の母を思へり  
しょうじょ おも

埼玉県朝霞市 小松 隆  
さいたまけん あさかし こまつ たかお

盛岡に降り立ち凜と張る冷氣に  
もりおか お た りん は れいき

おのず吾が背の  
わ せ

伸びるをおぼゆ  
のほゆ

神奈川県逗子市 山口恵子  
かながわけん しづきし さんぐち けいこ

縄文の末裔の子ら集い居て  
じょうもんのへい まつえい こ つど い

野焼きの焰  
のやき はむら

瞳にうつす  
ひとみ

岩手県盛岡市

小野泉

熱い秋  
あつ あき

啄木鳴ぶ城跡で  
たくぼくしの しろあと

ロツク歌えば石垣鳴る  
ろっく うたはいは いしがきうな

岩手県盛岡市 三澤信裕  
岩手県盛岡市 みさわ しんご

上の橋  
かみ はし

民子の歌碑ぞ 愛しや  
たみこ かひ いとお

さやけし瀬音 汝が歌の里  
せおと せうた さと

東京都新宿区 佐藤慶子  
とうきょうし しんじゅくく さとう けいこ

夕暮の篝火燃える大空に  
ゆうぐれ かがりび も  
おおぞら

花火合団に  
はなびあいだ

山車動き出す  
だ しうだ

岩手県盛岡市

花坂俊子

もりおか しんじやぶさめ  
盛岡の神事流鏑馬みごとなり

いたまといぬ  
板的射抜き

きゅうしやかくちゆう  
九射皆中

青森県八戸市 黄錦渓湖(本名:祖行)

しんさい あや  
震災で危ぶまれしが

もりおか せいかつがわ  
盛岡の中津川には

さけ そじょう  
鮭の遡上す

岩手県盛岡市 鈴木 充

二百キロを

のぼり果たした鮭の背に

あき ひひか めだる よう  
秋の陽光るメダルの様に

岩手県盛岡市 小野 泉

平成二十三年十二月選 秋の部

投稿数 二百十六首

選者 八重嶋 熱氏

秋の部優秀賞十首

ふるさとへ向う車窓に

岩手山

いわてさん  
きゅう つま かいわ 今ま  
急に夫との会話が訛る

千葉県茂原市 下村 弘子

ちみつ なんぶてつびん  
緻密なる南部鉄瓶もんようの

指の動きの  
ゆび うご

点の確かさ

茨城県高萩市 大鳥 正男

あえぎつつ夫と登りし  
いわてさん  
岩手山サービスエリアに

立ちて仰げり

たくばくよ  
ありがとうさと啄木詠みしふるさとの  
山あたたかし  
しゃそう み  
車窓に見ゆる

兵庫県川西市 福井 順子

青森市 木浪 みつゑ

たくばく ぬ だ  
啄木が抜け出しだとふ

がっこう あとち た  
学校の跡地に立てば  
あきかせ す

秋風の過ぐ

盛岡市 中嶋 富子

たくばく  
啄木の  
きょうべん  
教鞭とりし学舎で

われ まな  
たくばくしの  
私も学びて啄木偲ぶ

神奈川県藤沢市 秋山 昭子

もみじば  
紅葉の  
とも にくき じゅうたん  
積る錦の絨毯を

もりおかじょううあと  
盛岡城跡にふかふかと踏む

盛岡市 星野 寛顕

らんかん あゆ よ  
欄干に歩みを寄せて  
なかつがわ そじょう さけ  
中津川を遡上の鮭に  
みい ひとがき

見入る人垣

ひだま さと あなた つ き  
日溜りの如き貴方に付いて来て

もりおか ふゆ

盛岡の冬

ごじゅつかいこ  
五十回越す

盛岡市 佐藤 忠行

盛岡市 鈴木 栄

サルビアの

あか ほのか も つ  
赤き炎も燃え尽きて

もりおか ふか

盛岡の秋徐々に深まる

盛岡市 鈴木 充

〔講評〕啄木を通した盛岡、岩手へのあこがれ、思いを詠んだ歌が多く見られ、主旨に十分添うものであった。

また、採り上げた作者が県外と盛岡在住各五名であったことも今回の特徴である。

平成二十四年十二月選 秋の部

投稿数 百二十三首

選者 八重嶋 熱氏

秋の部優秀賞十首

名のごとく  
石割桜岩を割く

震災越えて先てどごとくに

倉敷市 佐藤 豊行

こはるび  
じゅうろくらかんこうえん  
小春日の十六羅漢公園の

こも  
木洩れ日受けて

らかん  
羅漢ほほえむ

盛岡市 小笠原 敏夫

こざかた  
しろ  
不來うのお城の

もみじみ  
ひと  
紅葉見る人の

「おお燃えてる」と感嘆の声

盛岡市 鈴木 充

み  
見る度に  
なんぶこだいかたぞ  
南部古代型染めの

あい  
ふか  
藍の深さに心鎮まる

埼玉県北葛飾郡 小野寺 史子

若きころ

あくがれていし啄木の

住まいを訪ね八十路になりて

東京都中野区 武田 京子

盛岡市 鈴木 充

じょうし  
た  
城趾に立ちて眺むれば

はつかんせつ  
なんぶふじみ  
初冠雪の南部富士見ゆ

松戸市 菊池 允二

もみじ  
紅葉なる

じょうし  
た  
城趾に立ちて眺むれば

はつかんせつ  
なんぶふじみ  
初冠雪の南部富士見ゆ

しぶたみ  
「渋民」とふ

ち  
地に鳥がれつ下り立てば

たくばくせいら  
あめ  
啄木生地しめやかに雨

熊本県合資市 野上 久枝

眠られぬ  
よる  
夜はひとりで啄木の  
よる  
かしゆう  
たくばく  
啄木ひろげて声出して読む  
かしゆう  
こえだ  
よ

愛知県犬山市 服部 文代  
愛知県犬山市 服部 文代

あのなはん  
ことば 余まりやさ  
言葉の訛優しくて

寒さも忘れ話し込む街  
さむ はなまち

盛岡市 堀米 公子

啄木の新婚の家にくつろぎて  
じもと や  
地元の姫と  
じもと おうみ  
親しく語らふ  
した かた  
しゃくごうらふ

北海道深川市 森田 純子

平成二十五年十二月選 秋の部

投稿数 百四十三首

選者 八重嶋 敦氏

秋の部 優秀賞

みちのくに

鮭遡りくる街ありて

擬宝珠にもたれ そを見てゐたり

東京都江東区

藤村 清彦

白鳥の 来る日も近い

子供らは 北風のなか

落葉とかけっこ

盛岡市 西川 政勝

岩手山

神のごとくにたたずみぬ

北上川にかげをおとして

紫波郡紫波町

蓑岩 フヂ

ふたたびもみたびもここに啄木に

あいにし我は

鳴門の生まれ

冷麺の器の中の

果物が梨にかわりて

盛岡の秋

盛岡市 小池沢 和志

あおぞら　き　れ　る　は　さ　み　た  
青空を切れる鉢で裁つごとく

い　わ　て　や　ま  
岩手の山は

り　ん　そ　び  
凜と聳える

盛岡市 中島 久光

わ　た　き  
渡り来ぬ

し　ら　ど　り  
白鳥たちは 優しけれ

ち　か　よ　る　こ　は  
近寄る子らに 羽ばたき見せて

盛岡市 赤坂 昌信

い　わ　き　さ　ん　あ　お　お　も　う  
岩木山仰ぎて想ふ

ふ　る　さ　と　の

ゆ　き　い　た　が　ん　し　ゅ　う　ざ　ん  
雪を抱きし岩驚山を

青森県青森市 鈴木 操

も　り　お　か　の

た　い　ふ　う　い　っ　か　し　ろ　あ　と  
台風一過の城跡に

ぎ　ん　なん　み　い　ち　め　ん　お  
銀杏の実の一面に落つ

盛岡市 鈴木 充

【講評】秋冷の岩手山や遙上の鮭、帰ってきた白鳥など、盛岡の秋の風景や風物を情的に詠った歌がほとんどであり、すがすがしいとともに、ほのぼのとした人情味を感じさせる歌が多くった。

のぞきこむ川面キラキラ鮭のぼる  
かわも　かけ

おかえりなさい

あ　き　な　か　つ　が　わ  
秋・中津川

盛岡市 林 晶子

平成二十六年十二月選

秋の部投稿数 二百五十七首

選者 八重嶋 熱氏

『もりおかの短歌』

秋の部 優秀賞十首

あーには

啄木の悩みを空が受け止めていた

東京都小平市 萩原 慎一郎

旅人の  
われ

我をやさしく迎えたり

もりおか駅の啄木の文字

宮城県仙台市 沼沢 修

いつの日も凛と聳ゆる岩手山  
めげずに生きよと  
鼓舞する如く

青森県青森市 鈴木 操

強力の太枹太鼓  
な ひび  
あおぞらたか もりおか だし

青空高し盛岡の山車

岩手県盛岡市 三澤 信裕

鳴り響き  
な ひび  
どうしほ  
ひろえ ば  
どうしん  
かえ て  
うちまるどお

柘の実を拾えれば  
とわ み  
ひろえ ば

しばし童心に還してくれる  
うちまるどお

内丸通り

岩手県盛岡市

中島 久光

岩手県盛岡市

流離の日々を思ひつつ  
かいうんぱし  
開運橋のたもとに立てり  
た  
千葉県市川市 長田 強子

岩手県盛岡市 赤坂 昌信

さ  
えゐ  
咲き揃う

マリーゴールドの径行けば  
じょうこうじ　こぶ　おいすざたか

常光寺の瘤の老杉高し

岩手県盛岡市 小林 貴史

城跡の空にそびえる大木に  
しろあと　たいほく

道を尋ねる

みち　たず  
かぜ　たびびと

風の旅人

秋田県大仙市 藤田 直樹

「からめ節」  
ぶし

笊持て踊る敬老会

ざるも　おど  
けいろうかい  
さんは　どうさ　いま　つた

金掘る動作今に伝へし

岩手県盛岡市 掘米 公子

〔講評〕岩手山、盛岡祭の山車、内丸通りの柳の実、盛岡城跡、からめ節などバラエティに富む作品群。中でも啄木に思いを寄せる歌が半数を占め、没後百三年、なお啄木ファンの多いことが分かります。

※今回審査の結果、ジュニア部門の優秀賞は、該当がありませんでした。

平成二十七年十二月選 秋の部

投稿数 百 首  
選者 八重嶋 勲

『もりおかの短歌』

秋の部 優秀賞十首

その昔  
たくばくかしゆう  
啄木歌集を和紙に包み

若きいのちを絶ちし女あり

静岡県伊東市 北川  
ひと

純彌

木枯らしが

落葉を鳴らし吹き抜けた  
おと

音もやさしいもりおかの町

盛岡市 赤坂 昌信

頂の白さ際立つ岩手山

その雄雄しさを

刻みて生きる

青森県青森市 鈴木 操

早朝の寒さが肌にしみる頃

包む朝霧  
開運の橋

洋野町 芦口 このみ

大学のギンドロの木に鳥群れて

銀白の葉に  
秋のざわめき

盛岡市 照井 時彦

わが祖母の  
生家残れる鉢屋町  
暮れ早くして鐘の音聴こゆ

青森県八戸市 木立 徹

中津川の母の匂いに誘われ  
今年も鮭が  
遡上して来る

盛岡市 中島 久光

賢治さん、  
けんじ

あなたの愛した学舎の  
まなびや  
窓のむこうは透き通った秋  
まどか

盛岡市 林 晶子  
もりおかし りい あきこ

光原社より  
こうげんしゃ

北上川のながれ見え  
み  
心おどらす賢治の世界  
こころ  
けんじ せかい

新潟県新発田市 三浦 ユリコ  
にいがたけん しんぱつち みうら ユリコ

秋の部 ヘジュニア部門／ 優秀賞三首  
かみ はし  
上の橋  
ひいじいちゃんが 作つたと  
はじ つく  
初めて知つたよ すぐきことかな  
はじ  
盛岡市 竹田 悠人  
もりおかし たけだ ゆうじん

四千も  
よんせん

短歌作つた 啄木の  
たんかつく たくぼく  
人生学びおどろきいっぽい  
じんせいまな

盛岡市 浅田 健志  
もりおかし あさだ けんじ

岩手山  
いわてやま

人生学びおどろきいっぽい  
じんせいまな

校庭に立ち いつ見ても  
こうてい いつみても  
気もちおちつき やる氣が出るな  
き  
で

盛岡市 小笠原 侑良  
もりおかし おがさわら ゆうりょう

〔講評〕この度も、岩手山、盛岡の街、中津川遡上の鮭など盛岡の秋の風情  
に思いを寄せた歌が多くたんですね。啄木歌集を抱いて自らの命を絶つた  
女性の歌は痛切。賢治関係の歌三首が入選したのは大きな特徴でした。

平成二十八年十二月選 秋の部

投稿数二百九十六首

選者 八重嶋 敦

『もりおかの短歌』

秋の部 優秀賞十首

錦秋に 彩られたる  
不来方のかの城跡に 我も寝転ぶ  
 盛岡市 赤坂 昌信

雪吊りの 韻  
縄にいのちを託しきり  
 石割桜静かに眠る

青森県青森市 鈴木 操

北上の瀬音枕に啄木の  
 歌を読みたし  
 四季折々の

北海道北斗市 有賀 久雄

叱りても宥めるごとき南部弁  
 和して流れぬ

もりおかの人

盛岡市 及川 宗享

レンガ館い出し生徒に道聞かれ  
 わんこ蕎麦屋を  
 指さす昼どき

盛岡市 堀米 公子

稻光り実りの秋に

紺碧の空岩手の山よ

友逝きて

東京都江戸川区

小松 節子

稲光り実りの秋に

紺碧の空岩手の山よ

友逝きて

東京都江戸川区

小松 節子

久方の

盛岡友の 手料理

うましなつかし ドカ雪もとけ

東京都東大和市 阿部 リエ子

秋の部（ジュニア部門） 優秀賞三首

与の字橋 鮎は来たかと見下ろせば  
となり

隣にひとり

またもうひとり

盛岡市 小地沢 和志

コスマスを 近くで見ると  
いつもより かがやいて見え

息する実感

盛岡市 石戸 伶奈

あさ早く市場へ行つて

すいか買う

昼とはちがう爽やかな風

盛岡市 藤根 美月

ホームレスらしき女見ゆ

ひとみ

吾ドキドキと

われ

夫を待ち居り

われ

大船渡市 津田 美知子

盛岡の駅は活気満ち田舎者の

もりおか

えき かつきみ いなかもの

吾ドキドキと

われ

生け花見てはエスカレータに

えきなか

駅中で

いなか

鶴見 和夫

つま

お

和夫

うすももの石割り桜

あたた

温かい

あたた

花びら散つても笑顔が光る

はな

えがお

ひか

盛岡市

山崎

結菜

〔講評〕東北の秋は頭で想像する以上に短く感ぜられるものだ。特に盛岡はさんさの熱気がさめやらぬ中、坂道を転げ落ちるようすに秋が訪れ、ややもすると秋を愛する心の準備が出来ぬまま冬を迎えることとなる。天はどこまでも高く、日差しはある意味夏よりもまぶしく感ぜられるのはそのせいかもしれない。これら歌たちはこの秋の日差しを等しく浴びて、輝く一瞬の風景を掬い上げたものである。冬の足音を聞きながらしばし秋の盛岡を味わつてみるのもいいだろう。

平成二十九年十二月選 秋の部  
投稿数 三百二十四首  
選者 山本 玲子